

第2章 平成22年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる教育活動を行っている。具体的には、展示・公開活動として当館展示室において年度中3回前後の企画展示を行うこと、教育活動としては年度中1回の市民対象公開授業を開催すること、そして学内の希望者に対し考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。

平成22年度は、展示・公開活動として、30回目となる企画展を開催した。その他、平成20年度より開始した学内の他の学術分野との連携企画として、大学情報機構メディア基盤センター杉井学准教授との連携により学術資料写真展を、図書館との連携により学術資料展を開催した。また、平成22年度は新たに山口県大学博物館連携事業を開催した。

社会教育活動に関しては、農学部附属農場との共催により第10回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう5－』を開催した。その他、地域のNPO法人からの要請により、『野焼きワークショップ』を共催にて実施した。

当年度は本学中期計画の初年度に当たるためか、昨年、一昨年に比して地下の掘削を伴う開発工事計画が少数であったため、埋蔵文化財保護業務にかかる負担は軽減した。その結果、新たな取り組みとして展示活動では大学博物館連携事業を開始し、情報公開活動として「館蔵資料調査報告書」の刊行を開始した。また展示活動においては準備期間を確保することが可能であり、広報活動も十分に行えたためか、総入館者数は展示活動開始以来最多の1,700人を超えることとなった(表8)。以下に平成22年度に実施した展示公開活動・社会教育の概要を報告する。

表8 埋蔵文化財資料館利用者の推移

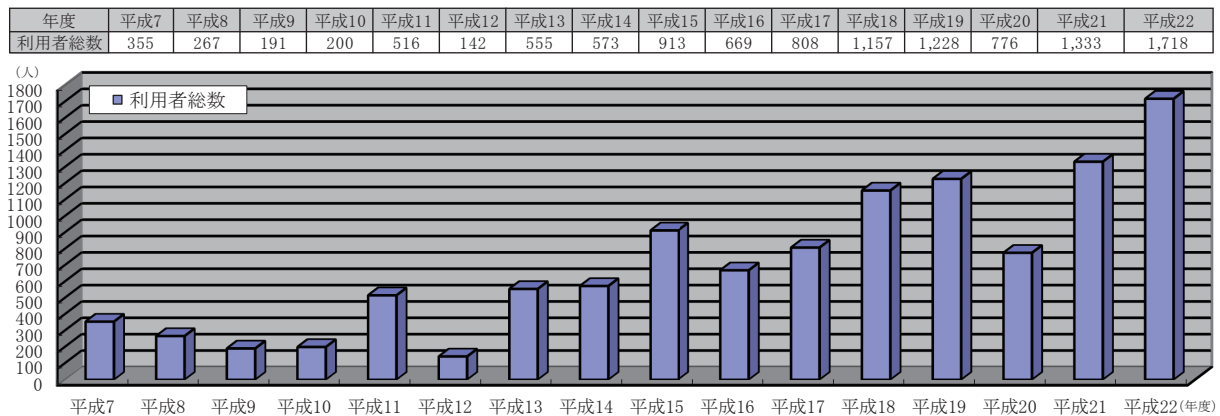
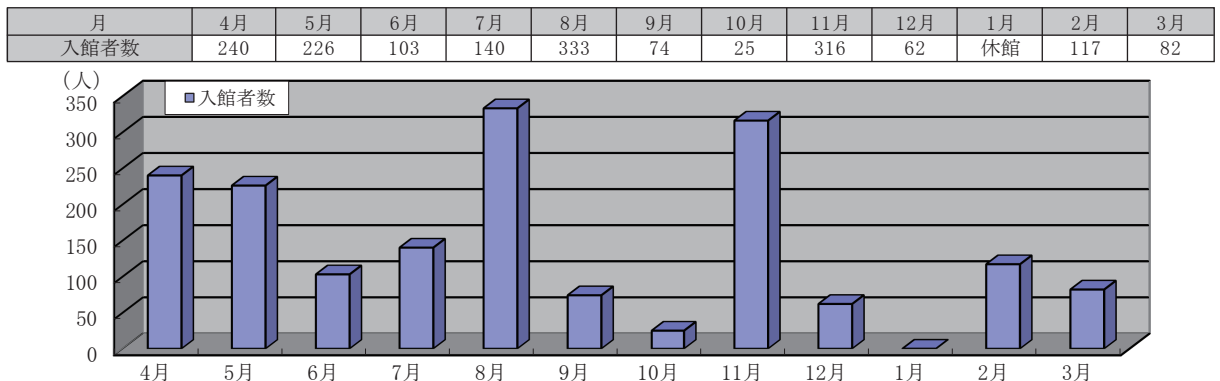


表9 平成22年度月別入館者数



第1節 資料館における展示公開活動

1. 第30回企画展『高坏～盛る器～』を開催

平成22年度は、弥生時代以降普及し、古代まで供膳具の一角を占める器種「高坏(土器)」をテーマとした企画展示を、9月6日(月)～10月8日(金)の期間で開催した。展示構成は以下の通りである。

- ①現代に用いられている仏前・神前供物用高坏(漆器)の展示解説
- ②本学吉田キャンパスが所在する吉田遺跡出土の高坏を時代ごとに展示、形態変化を解説
- ③古代の高坏の生産として、山口市所在陶窯跡群出土資料(山口市教育委員会所蔵)を事例に展示
- ④古墳時代の祭祀における高坏の奉獻状況を山口市所在西遺跡出土土師器群(山口市教育委員会所蔵)を事例に展示
- ⑤古墳時代の葬送儀式における高坏の役割を防府市所在向山古墳群出土資料(防府市教育委員会所蔵)を事例に展示解説

当展示は、近年実施した吉田遺跡の発掘調査において、古代の良好な高坏が数多く出土したことを契機とする企画である。器の形状と法量の変化は、各時代における食事形態の変化を間接的に示すと考えられること、食事以外での使用状況を考察することにより高坏という1器種の担った役割を考察し、表現することを目的とした。やや難解な展示構成となったが、ある程度目的は達せられたかに感じる。

大学夏期休暇中の1ヶ月という限定された期間であったが、会期中99名の方に観覧いただいた。観覧者からは、「高坏にデザインがあり、それが変遷することが印象に残った」「高坏が現代の仏壇に残っていることに驚いた」という声が寄せられた。今後も特徴ある考古資料を用い、学術展示を開催したい。

【註】

- 1) a:横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成18年度－』,山口
- b:横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』,山口
- c:横山成己(2013)「農学部附属農場水田暗渠排水工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成21年度－』,山口



写真 86 第 30 回企画展ポスター



写真 87 展示の様様

2. 学内連携企画展『学術資料写真展 MANABU's Eyes Vol.1 Relics 光と影で蘇る古代のデザイン』を開催

当館は、本学における他分野の教育研究資料をより広く地域に公開するため、学内連携企画展を開催している。平成20年度は本学教育学部美術教育教室の学生有志と連携し、美術展示『INSTALL -インストール- A・I・A アート・イン・アルケオロジー』を開催し、平成21年度は、本学理学部地球圏システム科学科との連携により、標本展示『鉱物・岩石 七変化 -Beauty and Wonder in Mineral World-』を開催した。3回目となる平成22年度は、メディア基盤センター杉井学准教授による学術資料写真展を開催することとなった(開催期間:平成22年6月14日(月)～8月27日(金))。

撮影の対象としたのは当館所蔵の考古資料中、縄文土器、石鏃(縄文)、弥生土器、石鏃(弥生)、ガラス小玉(弥生)、石製模造品(古墳)、子持ち勾玉(古墳)、製塩土器(古墳)、土錘(古墳)、瓦当(平安)、陶器播鉢(近世)、窯道具(近世)などである。

会場では実物資料と大きくプリントアウトした写真を並べ展示し、それぞれに「撮影者の視点」「研究者の視点」から解説文を付した。その他展示スペースの関係で展示できなかった写真はデジタルフォトフレームを用い作品を紹介した。

埋蔵文化財調査報告や考古学研究においては、遺物撮影は通常被写界深度を深く、陰影を付けずに行われるが、当展では多くの写真が被写界深度を浅く、陰影を強く付けられており、我々の目からも新鮮な画像が並ぶこととなった。会期中、549名の方々に観覧いただいたが、観覧者が実物と写真を熱心に見比べている姿が印象的であった。

当館と、杉井准教授が所属するメディア基盤センターは、学内において大学情報機構という同一部局に所属している。当館は学術情報としての埋蔵文化財を保護し、各種情報化して公開する業務を、メディア基盤センターは学内ネットワークサービスや維持管理、情報セキュリティ等を主要業務としているが、観覧者からは「遺跡の研究成果や建物をCG復元をメディア基盤センターと合同で展示して欲しい」などの要望が寄せられた。

学内連携企画展は、学内の様々な分野の研究資料を公開するための取り組みとして開始したが、今後は研究や技術面での交流に深化させる必要がある。先後が逆であるが、資料展示がその契機となるよう今後も取り組みを継続したい。

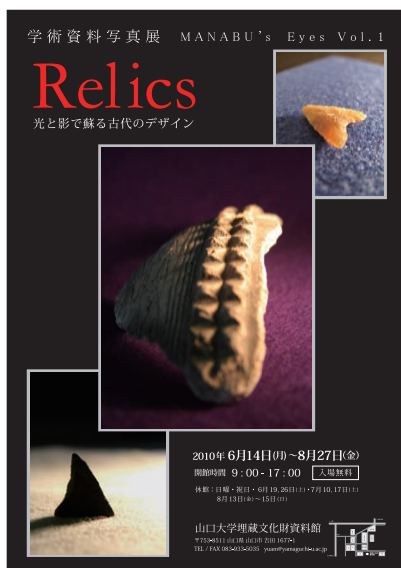


写真 88 展示ポスター



写真 89 展示の様様

3. 大学情報機構連携企画展『資料に刻まれた記憶～文字・記号・印から読み解く』を開催

前述のメディア基盤センター同様、本学図書館は大学情報機構に所属している。当企画展では、両施設がそれぞれの特徴を生かし、図書館が「蔵書印」をテーマとした資料展示を、当館が土器や木製品に対し意図的に施された文字・記号等をテーマとした資料展示を実施することとなった。

展示準備に際し、図書館より学生ボランティアスタッフ(図書館学生協働)との共同作業とする旨連絡があったため、当館もボランティアスタッフを募り、展示品を課題とし、解説パネルの作成を指導する運びとなった。

ボランティアスタッフとして活動したのは、大熊玲奈氏(本学人文学部考古学研究室3年生:当時)である。当展示に出展を予定していた古墳時代から古代の遺物である墨書須恵器、ヘラ記号のある須恵器・土師器、荷札木簡、柱根、木製品(ものさし)の内、後者2点の解説パネル作成に取り組んでもらった。短い準備期間の中で原案が提出され、多少の校正を加えパネル化した。

会期中489名の方々に観覧いただいたが、観覧者からは「資料を見て、それが何を示すのかを推理するような実験的なパネルがステキでした」「専門用語だらけの短い解説文より、こんな素晴らしい文章なら文字数が増えても読んで疲れそうにない」「図書館と資料館の連携というのが新鮮」などの好意的な声が寄せられた。当館は当初より図書館との連携性を視野に入れ設立されたものの、これまでは「隣接地に立地する」以外の具体的な連携は皆無に等しい状況であった。国立大学法人化後、当館と図書館は同一部局に所属することとなり、その後イベント等で合同企画を実施してはいたが、当館の博物館施設としての機能と図書館機能の具体的な連携事業は本展がその第一歩であったと言って良いのではなかろうか。

一方で「パネルを作ったのが学生だという事をもっとアピールした方がいい」「順路がどちら回りか分かりにくい」といった声も寄せられている。当館は平成20年度以降、考古学以外の学術分野と連携した展示を試みているが、未だ試行錯誤する段階にある。館員4名中3名は学芸員資格保持者、1名は学芸員補である(平成22年度当時)ものの、設立以来主幹業務は構内の埋蔵文化財保護業務であり、展示活動は「空き時間を使っての、もしくは自転車操業的な事業」という側面が強い。今後は積極的に他の学術分野と連携することにより、本学博物館施設としての機能を高められるよう努めていきたい。

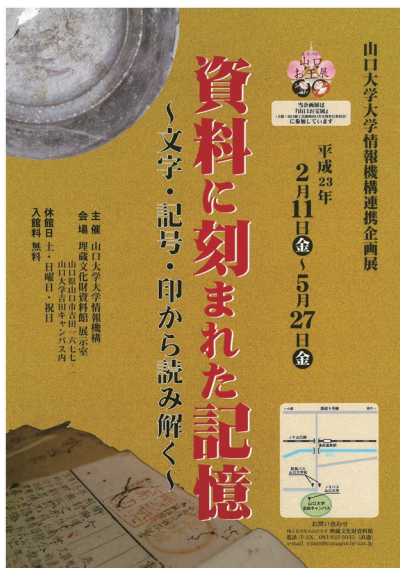


写真 90 展示ポスター



写真 91 展示模様

4. 大学博物館連携第1弾『EXCHANGE! 山口大学埋蔵文化財資料館×梅光学院大学博物館』を開催

平成22年度の新たな取り組みとして、大学博物館連携事業を実施した。山口県には、学内に博物館施設を有する大学として、本学と梅光学院大学が存在する。梅光学院大学博物館は博物館相当施設に、当館は博物館類似施設に位置づけられているが、その2館が交流することにより、両校が所蔵する様々な貴重学術資料をより広い範囲に公開し、さらには県外大学博物館との連携、県内他大学との連携を模索することを目的としたものである。

事業の契機は、平成18年(2006)の夏、当館季刊広報誌『てらこや埋文』の1コーナー、「山口県内の博物館紹介」の取材のための梅光学院大学博物館訪問に求められる。取材に対応いただいた博物館の専任学芸員である佐藤睦子氏と将来の大学博物館連携を約したのであるが、その後実現せぬまま4年が経過することとなった。

事業が動き出したのは平成22年初春のことである。会合や電子メールでの討議を重ね、実施されたのが以下の事業になる。

事業タイトル

大学博物館連携第一弾 交流展

『EXCHANGE! 山口大学埋蔵文化財資料館×梅光学院大学博物館』

事業内容

梅光学院大学の所蔵資料を当館にて、当館の所蔵資料を梅光博物館にて展示する

【梅光学院大学博物館会場】

タイトル『まるごと! 山口大学埋蔵文化財資料館』

紹介文:山口大学のキャンパスは県内5ヶ所(山口市:吉田地区・白石地区、宇部市:小串地区・常盤地区、光市:光地区)に散在していますが、その全てが「遺跡」の上に立地しています。今回の展示では、吉田地区が所在する「吉田遺跡」をご紹介します。吉田遺跡は、旧石器時代から江戸時代までの全時代の遺構・遺物が発見される、県内でも有数の複合遺跡です。山口大学の地下にひっそりと眠る悠久の歴史をご堪能下さい。

【山口大学埋蔵文化財資料館会場】

『梅光学院大学博物館・コレクションをご紹介します!』

紹介文:梅光学院大学博物館では、特に山口市域との縁が深く、梅光学院史と合わせて関心を持っていただける資料群をご紹介します。特別出品として、吉敷毛利氏の郷校「憲章館」の開学に尽力した漢学者・服部傳巖を曾祖父にもち、本学院の前身「光城女学院」の創設者で、キリスト者の服部章蔵先生の史資料を出品いたします。

開催要項

【主催】山口大学埋蔵文化財資料館・梅光学院大学博物館

【後援】大学コンソーシアム山口・山口県博物館協会・大学博物館等協議会

【会場】山口大学埋蔵文化財資料館展示室・梅光学院大学博物館展示室

【開催期間】平成22年11月1日(月)～平成22年12月11日(土)

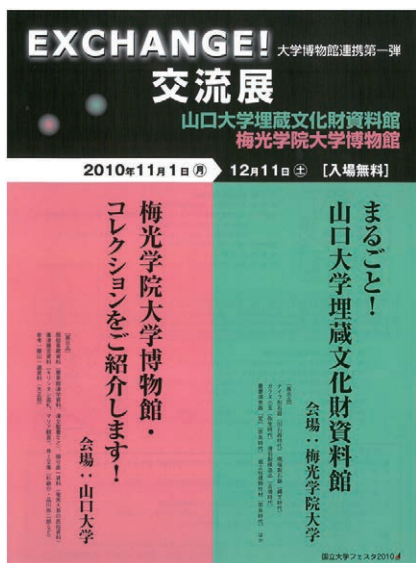
【休館日】山口大学埋蔵文化財資料館 土・日・祝日(11月1・27日、12月11日の土曜日は臨時開館)

梅光学院大学博物館 水・日・祝日

【開館時間】山口大学埋蔵文化財資料館 午前9時～午後5時

梅光学院大学博物館 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

【入館料】無料



事業ポスター



梅光学院大学会場『まるごと! 山口大学埋蔵文化財資料館』



梅光学院大学会場展示模様



梅光学院大学会場ミュージアムトーク風景



山口大学会場『梅光学院大学博物館・コレクションをご紹介します!』



山口大学会場ミュージアムトーク風景

写真 92 大学博物館連携事業の様相

関連事業

【ミュージアムトーク】梅光学院大学会場 11月13日(土)13時30分～15時00分 担当:横山成己

山口大学会場 11月27日(土)10時～10時45分 担当:佐藤睦子

【シンポジウム開催】『中国・四国地区の大学博物館～いま大学の博物館が求められているもの～』

日時:11月27日(土)13時～17時 於:山口大学共通教育合併講義棟2番教室

第1部『中国・四国の大学博物館から報告』

- ・梅光学院大学博物館:佐藤 睦子(梅光学院大学博物館学芸員)
- ・山口大学埋蔵文化財資料館:横山 成己(山口大学埋蔵文化財資料館助教)
- ・愛媛大学ミュージアム:吉田 広(愛媛大学ミュージアム准教授)
- ・島根大学ミュージアム:会下 和宏(島根大学ミュージアム副館長・准教授)

第2部シンポジウム『いま大学の博物館が求められているもの』

- ・山口大学図書館:岡田 隆(山口大学情報環境部学術情報課副課長)
- ・山口県立山口博物館:伊原 慎太郎(山口県立山口博物館主任)
- ・山口県立文書館:金谷 匡人(山口県文書館副館長)

交流展示は1ヶ月強と短い期間での開催であったが、山口大学会場では378名、梅光学院大学会場では500名を超える入館者があった。観覧者からは「市内の他の大学ともコラボレートして欲しい」など多くの声が寄せられた。当館としても本格的な出張展示は初めてであり、当館展示室の2倍以上の空間と設備に戸惑いを感じつつも有意義な取り組みとなった。ミュージアムトークでは多くの学生の前で仮装させられるなどもあり、大学色の違いも感じることもあった。

シンポジウムに関しては、参加した当館のみが所謂「大学博物館」ではないため、他大学の博物館設立の経緯や事業など多くの情報をえることができた。また地域の公立博物館や文書館、大学図書館から大学博物館への具体的な要望を聞くことができ、大学博物館の存在意義を再考することができた。

事業の初年度ということもあり様々な問題が頻出したが、関係いただいた方々の協力無しには実施は不可能であった。今後のご指導ご鞭撻をお願いしつつ、末筆ながら関係者各位にお礼を申し上げたい。

【註】

1) 山口県内大学に「資料室」等の学術資料展示・収蔵施設は複数存在することをお断りしておく。

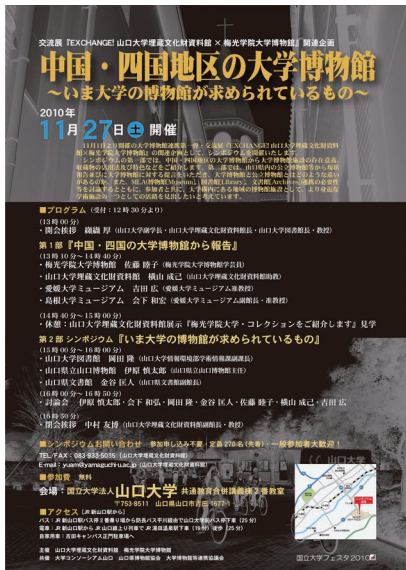


写真 93 シンポジウムポスター



写真 94 シンポジウムの模様

5. 平成22年度刊行物

1. 『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成19年度－』を刊行

平成22年度は、平成19年度に実施した構内遺跡発掘調査概報と資料館活動報告を所収した年報を刊行した。発掘調査関係としては本発掘調査1件(吉田)、予備発掘調査2件(白石・小串)、工事立会調査6件(吉田5・白石1)の調査成果が掲載されている。館の活動報告としては、展示・公開活動として8件の企画展示等事業を、2件の社会教育活動を報告している。その他、当館所蔵の土製経容器を報告する付篇を所収している。

2. 館蔵資料調査研究報告書1『見島ジーコンボ古墳群 第154号墳出土資料調査報告』を刊行

当館には、本学構内遺跡出土品以外に多くの県内遺跡出土資料が収蔵されている。大多数は本学名誉教授の小野忠熙氏が本学の教官であったころに発掘調査を担当した遺跡出土品であるが、事実上死蔵状態となっていた。これらの資料群をどのような形で学術公開するのが当館の課題であったが、本学の全学委員会である「山口大学所蔵学術資産継承検討委員会」にて見島ジーコンボ古墳群出土金属器の保存処理事業を実施する幸運を得たため、平成22年度の新たな取り組みとして継続的に館蔵資料の調査研究報告書を刊行することにした。

萩市見島においては、昭和35年(1960)から昭和37年(1962)の3ヶ年にかけて山口県教育委員会と萩市教育委員会の合同総合学術調査が実施された。その中で斎藤忠氏と小野忠熙氏が中心となり考古班が結成され、山口大学学生諸氏他の協力の下、見島ジーコンボ古墳群初の学術調査が行われた。その成果は昭和39年(1964)刊行の『見島総合学術調査報告』(山口県教育委員会発行)に掲載されたが、十分な資料整理・調査期間が得られなかったためか断片的な資料公開となっていた。報告書掲載の資料は現在萩博物館に、未報告資料は萩博物館と当館に所蔵されているため、この度第154号墳を調査対象とし、両館所蔵の資料を調査し、成果を1冊にまとめ刊行した。

3. 季刊山口大学埋蔵文化財資料館通信 第21号『てらこや埋文』を刊行

平成18年(2005)より刊行している広報誌である。平成22年度は発掘調査および展示活動等が多忙であったため、年度末に「春夏秋冬特大号」と称し、頁数を倍増して刊行した。当館の活動報告の他、「資料館この一品」コーナーにて六連島音次郎遺跡出土の朝鮮系無文土器を、「山口県内の博物館紹介」コーナーにて福田貝館(山口市徳地島地所在)を紹介した。

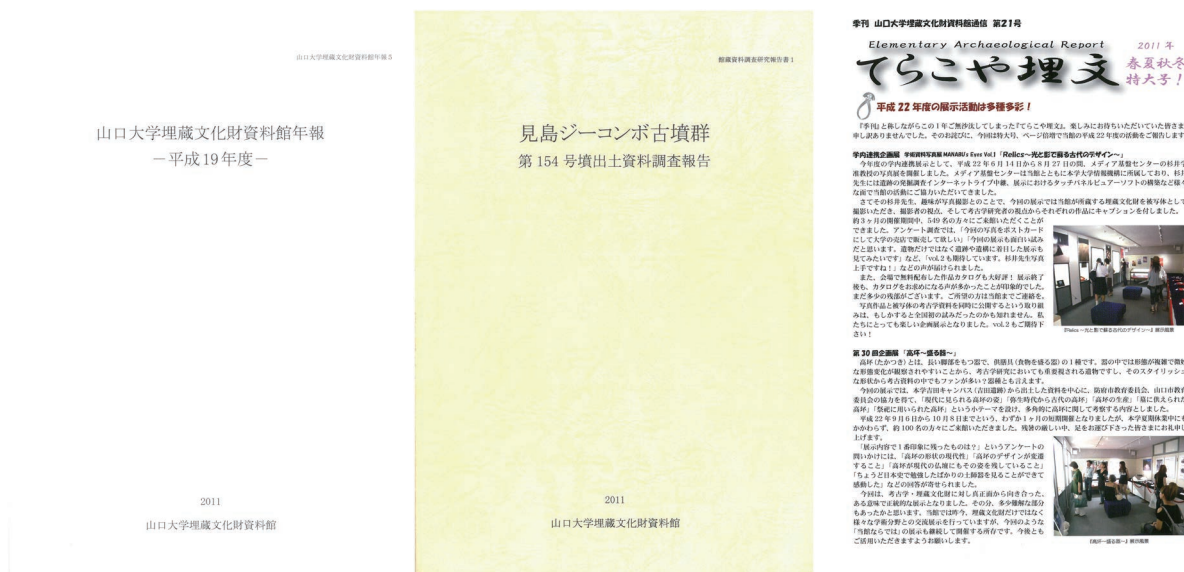


写真 95 平成 22 年度埋蔵文化財資料館刊行物